

## 巻 頭 言

11月20日、東京芸術劇場大ホールにて第31回自由学園音楽会が行われました。約1,900人のお客様の温かな見守りの中、児童生徒学生のそれぞれが精一杯の歌声を響かせ、演奏を行い、無事に会を終えることが出来ました。この音楽会への取り組みを中心に、2018年度の活動をまとめた年報第23号をお届けいたします。

自由学園は「思想しつつ 生活しつつ 祈りつつ」という教育理念のもと、一人の人の頭と体と心が調和をもって育ってゆく人間教育を目指しています。感性豊かな若い時期に、人格の土台となる人間の生地を織り上げるためには様々なよい体験が必要であるとの考えのもと、生徒たちは得意不得意に関わらず、音楽、美術、体操など、様々な本格的な体験を伴う学びに取り組みます。芸術教育について創立者は「芸術によってのみ育ちうる人間性がある」、「実利実用ではない芸術味の分かる人を育てたい」と述べていますが、近年、教育においても実利実用に役立つ内容が重視される傾向が強まる中、私たちはこの人間教育の理念を大切にしていきたいと思っています。

今回の音楽会は初等部生の元気な歌声から始まり、女子部・男子部の合唱、吹奏楽、弦楽合奏と続き、「メサイア」（ヘンデル）の全校合唱で結ばれるという構成でした。メサイアのハレルヤコーラスには、初めてリビングアカデミーも参加しました。

「メサイア」はキリストの受難と復活、そして私たち人類の救いの喜びと神への賛美が表現された音楽劇です。生徒たちがこの曲に思いを込めることはなかなか難しく、合唱リーダーの生徒たちも当日のプログラムに、「皆が熱心な信仰を持っているわけではない私たちが、この曲とどう向き合えばよいのか悩んでしまう」と書いています。しかしその悩みの中であって、生徒たちがこの文章を、「信仰を表現するのは難しいことです。この曲は音楽的にもレベルの高い曲ではありますが、キリスト教精神を生活の軸とする私たちの声で、私たちにしか表せない音楽を伝えられればと思います」という言葉で結んでいたことはうれしいことでした。

「メサイア」の終曲、生徒学生たちが一心に声を響かせる「アーメン」コーラスは、音楽会全体を締めくくるにふさわしいものでした。皆で創り出したこの音楽会が神様への捧げ物となったことを感じ、感謝の思いに満たされました。会の運営を陰で支える様々な働きあつての音楽会でした。これらの経験が一人ひとりの中で熟成し、いつの日か人生の豊かさを支えるものとなっていくことを願っています。

2019年12月

学園長 高橋 和也